

第85回選抜高校野球大会第9日は30日、甲子園球場で3回戦3試合を行い、県勢の済々黷は済美(愛媛)に1-4で敗れ、8強に届かなかった。

【1面参照】  
済々黷は1点先取され、た直後の五回裏、2死一、二塁から6番平下雄盛の中前打で同点に追い付いた。しかし八回、エース大竹耕太郎が済美打線に捕まり、2死一、二塁から三塁打を許すなどして

一気に3点を勝ち越され、大竹は切れのある直球と変化球を織り交ぜて11三振を奪ったが、制球が甘くなったところを痛打

された。打線はあと一歩のところまで済美の好投手・安楽智大を打ち崩せず、六回以降は無安打に抑えられた。大阪桐蔭は県岐阜商に

【評】済々黷は序盤の好機を逃し、主導権を握れなかったのが響いた。済美・安楽の速球にコンパクトな打撃で挑み、初回から連打で好機をつくるなど、押し気味に試合を進めたが、あと1本が出ず得点は五回の1点のみ。六回以降は安楽の緩急をつけた投球に苦戦。送りバントを失敗するなどで、得意の小技もいまひとつで、追加点を奪えなかった。

大竹は立ち上がりから直球、変化球とも抜群の制球で相手打線に的を絞らせず、七回まで被安打4、10奪三振。ただ、八回に疲れから制球がやや甘くなったところを狙われ、

済美は安楽が投打にわたり活躍。7安打されながらも要所を締めて最少失点で切り抜けた。打っては八回、勝ち越しの2点三塁打を放ち、勝負強さを見せた。(坂本)

きのこの結果

高知	3-1	常葉学園
済美	4-1	済々黷
県岐阜	5-4	大阪桐蔭

済美(愛媛)	000001100030014
済々黷	000001100000000

済美(愛媛) 11時34分 43000人  
済々黷 済美(11時34分 43000人)  
済美(愛媛) 000001100030014  
済々黷 000001100000000

済美(愛媛) 安楽 二塁打 安楽 太田 残塁 美 5 済 10  
済々黷 安楽 二塁打 安楽 太田 残塁 美 5 済 10  
併殺 美 0 済 1 (田口) 11 9回  
試合時間 1時間59分

# 済々黷 終盤力尽く

## 序盤に逸機「あと1本」

大会屈指の右腕、安楽智大を擁する済美(愛媛)相手に勝機はあった。初戦の常総学院(茨城)に競り勝ち、勢いづく済々黷だったが、前半の再三の先制機を逃すと、流れは次第に相手に

傾いた。「大竹(耕太郎)にばかり、重荷を背負わせてしまった」。力投したエースに報いることができず、中川洸志主将は唇をかんだ。

試合を進めた。だが、一、三、四回と得点圏に走者を進めるものの、あと1本が出ない。同点に追い付いた八回以降はスライダー、直球と緩急で翻弄(ほんろう)する安楽の投球術には

### 焦点

まりノーヒット。八回に頼みの大竹がつかまり、3点を勝ち越されて力尽きた。

「全国で互角に戦うためには、打撃が力不足だった」。西橋豪一(西)が振り返るように、打線は「一番の勝負強さに欠けた」。「全国レベルの投手はバント一つ、簡単にはさせてくれない」と川原諒平。送りバントや走塁など、一つ一つのプレーの精度を上げる必要性も痛感させられた。

終盤勝負を狙いながら、逆に終盤に勝ち越されると淡泊な攻撃に陥った。中川主将は「気持ちが悪く切れてしまつ、もろさがでた」と精神的な弱さも課題に挙げる。

ただ、収穫もあった。「最初は安楽君の球にバットが当たらないと思っていましたが、序盤から安打が出た。選手たちの成長を感じることができた」と池田満頼監督。2試合で無失策と大舞台でも堅守は光った。

夏は3季連続の甲子園を目指す。再び大舞台の土を踏み、躍動するには打線のさらなる底上げが鍵を握る。

(坂本尚志)



【済美—済々黷】5回裏、済々黷2死一、二塁。平下が中前適時打を放ち1-1の同点とする＝甲子園(谷川剛)

## 配球悔やむ安藤 夏へ「学んだ」

「1球目が甘く入ってしまった。今思えば、初球は外して相手の反応を見ても良かった。安藤太一捕手は勝ち越された八回の配球を悔やんだ。相手の大竹耕太郎は得意のストリートが抜群に切れた。序盤から快調に飛ばし、七回

までに10奪三振。だが、同点の八回、済美打線に捉えられた。2死一、二塁で、迎えた4番安楽智大への初球。やや外寄りの甘い高さに入った真つすを狙われ、左中間を破る2点三塁打を浴びた。勝負を決する手痛い一打に「大竹

も制球が狂うことがある。それを頭に入れた上での配球を考えるべきだった」と肩を落とした。昨夏の甲子園は一塁手で出場した。新チームになり捕手にコンバート。ぶっつけ本番に近い状態で臨んだ秋の県大

会では自身、納得のいく捕球ができなかった。それから「とにかく多くの球を受けよう」と、ひたすら投手陣や投球マシンの球を受け続け技術を磨いた。

クを被ったのだが、「相手の動きを見つつ作戦を見抜く。頭を使う」のポジションが好きたし面白い」と話す。攻守にチームの要。それだけに担う責任も大きくなる。「(安楽への初球は)慎重さが少し足りなかった」。捕手出身の池田満頼監督の厳しい言葉も期待の裏返しだ。捕手を始めて半年余り。まだまだ伸びしろのある女房役は「夏に向け、多くのことを学びました」と飛躍を誓った。

(坂本尚志)